



福岡で制作された《The Power of One 明鏡止水》が シャルジャ首長国でお披露目！



2023年度第1期のレジデンスにおいて、130人以上のサポーターと共同制作したジン・チェ&トーマス・シャインの大型インスタレーション《The Power of One 明鏡止水》が、なんとほるぼる海を越えて中東UAEのシャルジャ首長国で行われた国際芸術祭「第25回Sharjah Islamic Arts Festival」にて、新作とともに屋外展示されました。暮れなずむ空とのコントラストが美しいですね！

◀カルチャーセンター「The House of Wisdom」にて屋外展示された《The Power of One 明鏡止水》
The Power of One, The House of Wisdom
©2023 Sharjah Culture Trust, @sharjahculture and @moonlightmedia.me



ジン・チェ&トーマス・シャインの新作《The Center》▶
The Center, Sharjah Art Museum ©2023 Choi+Shine Architects, LLC

第25回Sharjah Islamic Arts Festival
展示期間：2023/12/13～2024/1/21[終了]

ミラノ・ファッションウィークに イ・ビョンチャンの作品が登場！



2022年度第1期のレジデンスアーティスト、韓国のイ・ビョンチャンさんも国際的かつジャンルを越えた活躍をしています。ソウル発のファッション・ブランド「Andersson Bell」とのコラボ企画として、2024年1月14日にイタリアで開催されたミラノ・ファッションウィークに新作の立体作品が登場しました。ヒヤーカッコいい。

◀ファッションショーの様子。モデルの背後で海中生物のようにうごめく、黒いビニールシートでできた作品

オンライン蔵書検索システム公開 約6万冊の蔵書が検索できるようになりました

あじび8階にある図書閲覧室は、アジアの近現代美術に関する専門図書室です。そのため図書資料は一般に流通していないものが多く、保存・管理上の観点から貸出や複写サービスは提供していません。それでも、ふだんあまり手に取ることのないアジア美術に関する本をもっと知ってほしい、本格的に知りたい方への調査・研究の手助けになれば、ということで昨年11月より蔵書検索システムの公開をスタートしました。ぜひご活用ください。



福岡アジア美術館 蔵書検索

<https://ajibi.opac.jp/>



AJIBI NEWS

FUKUOKA
ASIAN ART MUSEUM

vol.93



暗闇に点滅し浮かぶ少女は夢の象徴？それとも…

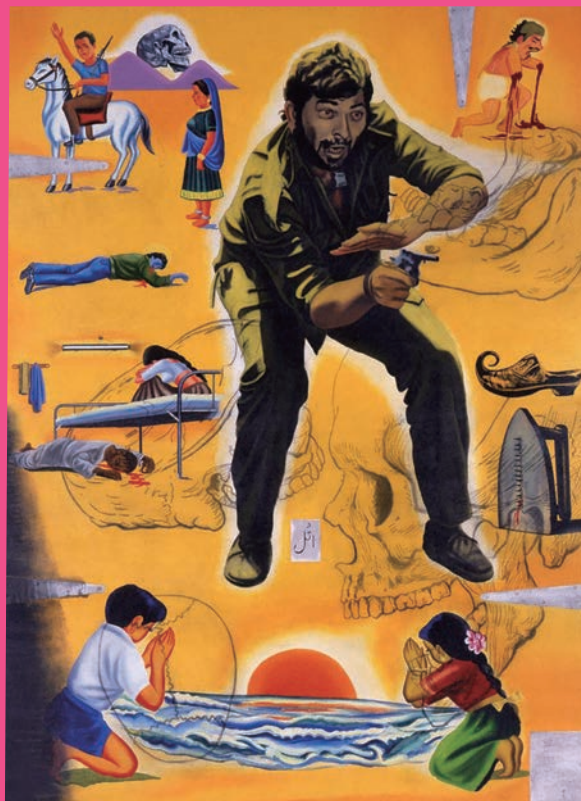
この作品の前に立ち、床のボタンを踏むと、台湾の歌謡曲『幸福の船出』（原曲は日本の歌）にあわせて額縁の電飾が点滅し、1940～50年代のレトロ写真をもとに描かれた少女の姿が見え隠れする複雑な仕掛け。その様子は一見郷愁をさそいますが、当時ではあり得ない格好の少女は、台湾の過ぎ去りし時間を表した虚像なのかもしれません。

ウ・ティエンチャン [呉天章] (台湾)《春宵夢 IV》1997年
Wu Tienchang (Taiwan) Dreams of Past Era IV, 1997

憧れ?! 皮肉?! 今を生き抜くヒント

アジアのポップ 斬り込む!

福岡アジア美術館
開館 25周年記念コレクション展
4/20(土)ー9/3(火)
7階 アジアギャラリー



アトゥル・ドディア (インド)《ガンボージュ色のガッパル》1997年
Atul Dodiya (India) Gabbar on Gamboge, 1997

インドきっての ダークヒーロー登場!!

血走った眼で銃を構える男は、1975年にインドで爆発的ヒットとなった映画『ショーレー (邦題: 炎)』に登場する悪役ガッパル。豪華キャストが出演したこの映画は、いまだに多くのインド人に愛されています。画面の上には、この映画の激しい暴力シーンを暗示するイメージが描かれ、合掌する子どもたちはそうした映画に熱狂する大衆を象徴していることが読み取れる不思議な絵画です。

日本のデコトラに通じる!? 夢や憧れをまとったリキシャ

今もバングラデシュの街を走り、庶民の足として利用されるリキシャは、派手な装飾できらめいています。とくに座席や幌の背面部分は、有名な映画スターや政治家、農村や都市風景、花や動物などさまざまな絵で覆われ、大衆の夢や楽しみが反映されています。



サイド・アハメッド・ホセイン [絵]、アリ・メカル [車体製作] (バングラデシュ)《リキシャ》1994年
Syed Ahmed Hossain [painting], Ali Mekar [rickshaw making] (Bangladesh) Rickshaw, 1994

あじびニユースでは数ある展示作品の中から、とくに時代や社会を鋭く突くような作品をピックアップして紹介。アーティストの風刺的でユーモア混じる視点を通して、アジア各地の大衆の動向を読み取ることができます。

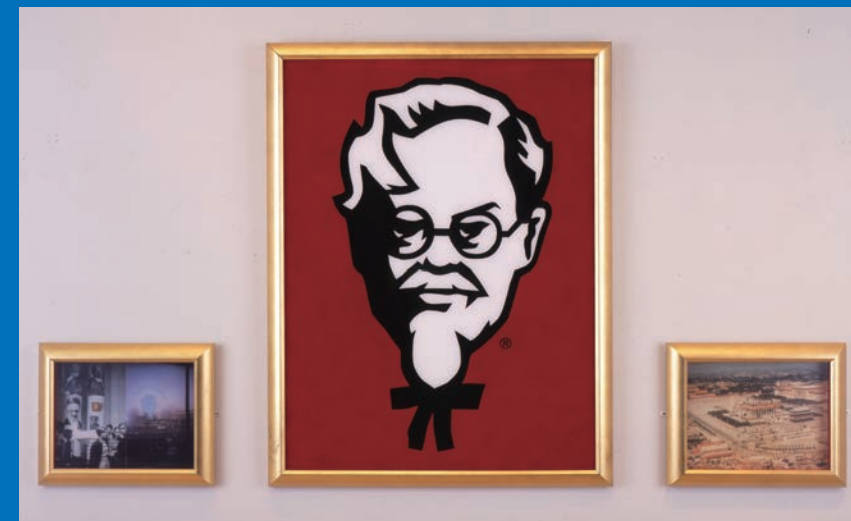
開館以降、アジアの大衆美術や民俗芸術などを積極的に収集し、既存の美術の枠にとられない新たな美術の価値創造を理念にしてきた当館だからこそできる、個性あふれるコレクション展になることでしょう。

アートに

アジアン・ポップ Asian Pop

25th Anniversary Collection Exhibition

一般 200 円、高大生 150 円、中学生以下無料



メイ・ディンイー [梅一伊] (台湾)《トロツキーに捧ぐ》1991年
Mei Dean-E (Taiwan) Homage to Trotsky, 1991

一見、あの人もよく見ると… 重なり合う 2つの世界のアイコン

ケンタッキー・フライドチキンの創業者であるカーネル・サンダースと、ソビエト連邦の草創期に活躍したが、のちにスターリンと対立して暗殺された革命家・トロツキーの顔を組み合わせた作品です。左右の写真は、ケンタッキー・フライドチキンが北京・天安門の風水学的に重要な場所に出店したことを示しています。共産主義とアメリカの資本主義との結びつきを表している皮肉が効いた作品です。

昨年からはまった「ベストコレクション展」に続き、当館の25周年を記念するものとして企画した本展。出品作品は一見明るく華やかですが、社会や時代に対して皮肉や冷笑、風刺を効かせたものが多く、今をたくましく生き抜くヒントが詰まっているような気がします。今だからこそ「見たい!」もしくは「見て良かった!」と感じる展覧会を目指して、尽力したいと思います。(趙純恵)

90年代中国で急速に広まった 消費シンボル、



ルオ三兄弟 [羅氏三兄弟] (中国)《我、北京天安門を愛す #29》1996-97年
Luo Brothers (China) I Love Tienanmen Square, Beijing #29, 1996-97

30点の連作絵画である本作は、伝統的な吉祥図から生まれて、政治宣伝的な機能をもつようになった「新年画」を下敷きにしています。1990年代の中国を席卷した消費文化のシンボル、コカ・コーラ、マクドナルドなどの商品と幼児が遊ぶ趣向は、大衆がもつ消費への欲望とともに、共産主義と資本主義という矛盾した国の現実を皮肉っています。

担当学芸員からのメッセージ

もっと冒険を！開館25周年を迎えたあじびへ

ヘリ・ドノ（インドネシア）、スペシャルインタビュー

あじび開館の原点に、福岡市美術館で1980年代から90年代にわたって4度開催した「アジア美術展」があります。ヘリ・ドノさんは1994年の「第4回アジア美術展」に参加し、滞在制作もしました。そして30年の時を経て、3月にあじびの25周年を記念してパフォーマンス作品《ワヤン桃太郎》を上演し、トークイベントにも登壇しました。ヘリ・ドノさんに、福岡での経験をとおしていろいろな話をうかがいました。
[注：インタビューは記念イベント前の2月に実施]



—ヘリ・ドノさんは94年に「アジア美術展」、そして2004年に「ミュージアム・シティ・天神」に参加されました。福岡は20年ぶりですね。

さきほど福岡市美術館に寄ってきました。公園側入り口から階段を登ってエスプラナード（2階屋外）に到着したときに、「ああ、ここだ！」と記憶が蘇りました。私が94年にパフォーマンスをした場所で、とても懐かしかったです。

—あじびで上演する《ワヤン桃太郎》は、インドネシアの伝統的な影絵人形芝居ワヤン・クリをベースにした作品で2015年に制作されています。今回、九州芸文館での1カ月の滞在制作プログラムにて再構成されると聞きました。

《ワヤン桃太郎》は「平等」をテーマに作ったものですが、初演時はシナリオがなく即興的に上演しました。それ以来、人形は何度か展示する機会がありましたが、上演自体はしていません。今回、九州芸文館での「悲劇の喜劇」という展覧会とともに《ワヤン桃太郎》をあじびで上演します。日本の昔話をもとにした作品ですが、日本での上演は初めて。せっかくの機会ですから、筑前琵琶や笙など日本の伝統的な楽器の奏者や、「シンデン」という歌い手も地元福岡の方にやってもらうなど、ユニバーサルなかたちで再構成する予定です。

—94年の福岡での滞在制作と比べて違いはありますか？

94年は《チェアー》という作品をワヤン・クリの形式で上演しました。このときは京都の舞踏家たちと制作しましたが、事前にジョグジャカルタや京都で練習をしたうえでの上演でした。今回は演奏者のみなさんに昨日初めてお会いしたのですが、以前からの知り合いのようにすぐに打ち解けました。



「25周年おめでとうございます。これからも進み続けることを願っています」
写真 今井さつき

プロフィール

ヘリ・ドノ Heri Dono

1960年、インドネシア・ジャカルタ生まれ、ジョグジャカルタを中心に活動。伝統的な芸術様式を取り入れながら独特の世界観を構築し、鋭い社会批評性をもった作品で知られる。1990年代から国際的にも評価され、長年インドネシアの現代美術界を牽引（けんいん）してきた。《愚にもつかないおしゃべり》など5作品があじび所蔵。

《愚にもつかないおしゃべり》1991年 Talking of Nothing, 1991



都市の現象学

2024
2/23－3/3

〔終了〕

ハンブルグ／東京／福岡 川辺ナホ



Naho Kawabe



《案図を求めて（-Et in Arcadia ego）》
2024年
In Search of Utopia (-Et in Arcadia ego), 2024

この記事の写真はすべて撮影：川崎一徳

いったい何が私たちの未来を
これほど不確かで、魅力あるものにしているのか

Winds of Artist in Residence 2023 3rd Period: Urban Phenomenology

—Just what is it that makes our future so uncertain, so appealing?

2023年度のレジデンス最後を飾る3期では、3人のアーティストが1月から滞在制作をおこない、Artist Cafe Fukuoka (ACF)と福岡アジア美術館にて成果展を開きました。ここではACFでの展示を振り返ります。

天神ビッグバンで目まぐるしく変わっている都市風景に注目し、あじびのボランティアに話を聞いたり、九大の学生たちと天神観察をするなどのリサーチを重ねた花田さん。「都市風景の中で隠れていたものの存在に興味をもった」といいます。成果展ではACFグランド・スタジオに、ビルに見立てた仮設壁を並べ、そこに天神を歩きまわって撮影したビルの側面写真など18点を展示しました。

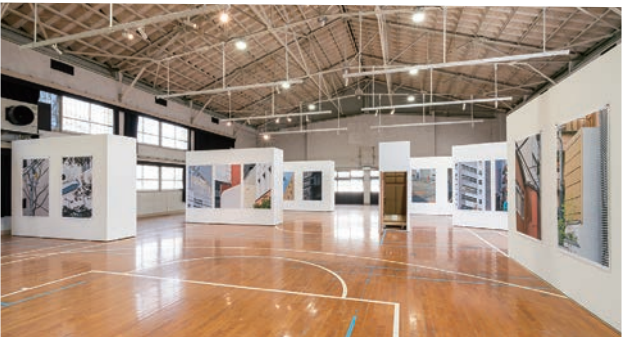
同じくグランド・スタジオに展示したチュさんは、「次へ」という大きな文字を装飾するとともに、マープル・エンジェルの楽曲「TENJIN☆BIGBANG」を用いたインスタレーションを発表しました。「私たちはどこに向かい、どこにたどりつくのか。それは何を意味しているのかを問いかけたかった」と語るチュさん。かつて卒業式がおこなわれた体育館という場所も、「次へ」の重要な要素だといいます。

一方、川辺さんは「炭」をテーマに、かつて福岡市西区にあった姪浜炭鉱の歴史や、未来の素材として期待されるカーボンナノチューブをリサーチし、ACFギャラリーにてインスタレーションを展示しました。「カーボンナノチューブのように石炭もかつては未来に夢をもたらし素材でした」と話す川辺さん。今回のレジデンスでは、同じように夢を描く未来が過去にもあったことが実感できたそうです。

3人のアーティストは2カ月という短い期間にもかかわらず、「都市」と「時間」という視点をもとに、それぞれのアプローチで福岡の過去・現在・未来を探り、私たちの気づかない都市の奥行きを表現してくれました。今後の活躍にも大注目です。

福岡

花田智浩



《都市の横顔》2024年 Side Face of the City, 2024



◀あじびでの展示

Fukuoka Tomohiro Hanada

ロンドン／深圳

メイタオ・チュ「曲美術」



《次へ》2024年 To the Next, 2024



あじびでの展示。左から《箱舟》《不動産》2024年 From left, Treasure Ship and Immovables, 2024

特別企画展 Special Exhibition

企画ギャラリー Exhibition Gallery

おいでよ！夏の美術館 vol.1
エルマーのぼうけん展

Welcome! Summer Art Museum vol. 1
Exhibition of My Father's Dragon

7/16(火)－8/25(日)

絵本ミュージアムの後継事業として、今夏より親子で楽しむミュージアムをスタートします。
はじめての開催となる今回は、『エルマーのぼうけん』を入り口に、子どもたちをワクワクドキドキの冒険の旅に誘います。驚きに満ちた会場で、子どもたちは不思議と出会い、様々な発見をすることでしょう。新たな夏の企画を、ごゆっくりお楽しみください。



© Dragon Trilogy Irrevocable Trust
Kerlan Collection of Children's Literature, University of Minnesota Libraries, USA.



© Dragon Trilogy Irrevocable Trust
Kerlan Collection of Children's Literature, University of Minnesota Libraries, USA.

コレクション展 Collection Exhibition

アジアギャラリー A Asian Gallery A

開館25周年記念 アジアン・ポップ

25th Anniversary Collection Exhibition: Asian Pop

4/20(土)－9/3(火)

→表面記事参照



ヤン・マオリン[楊茂林](台湾)
《遊戲行為・闘争篇》1987年
Yang Mao-Lin (Taiwan)
Behavior of Game Playing: Fighting Section I, 1987

アジアギャラリー B Asian Gallery B

新所蔵品展

New Collection Exhibition

4/20(土)－6/25(火)

多くの方のご好意で、当館のコレクションは現在5,000点を超えました。ご協力くださったみなさまへの感謝をこめて、2019年から2023年の5年間に寄贈いただいた作品を中心に約50点を紹介します。



ヤン・サンラン[楊三郎](台湾)《南台風光》1940年
Yang San Lang (Taiwan) A Scenic View of South Taiwan, 1940

アジアン・フォト・ヒストリー

Asian Photo History

9/14(土)－12/17(火)

19世紀後半に西洋向けに輸出された写真から、戦後の前衛写真、さらには多様な手法で撮影された「現代美術」としての写真まで、約150年にわたるアジアの写真史を所蔵作品で振り返ります。



ライオネル・ウェント(スリランカ)《シンハラ人漁師のトルソ》1936-37年頃
Lionel Wendt (Sri Lanka) Torso of a Sinhalese Fisherman, c. 1936-37

開館25周年記念 ベストコレクションII(仮称)

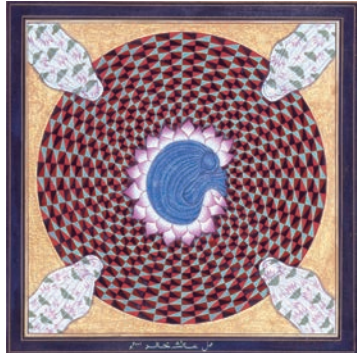
25th Anniversary of FAAM: Best Collection Part II (tentative)

9/14(土)－2025/4/8(火)

世界の大舞台で活躍するアジアのアーティストに焦点を当て、その傑作を一堂に会して紹介する「ベストコレクション」展。2回目となる今回は、アジア美術の底力を世界に知らしめた鬼才ホワン・ヨンピン(中国)による新収蔵の《駱駝》を中心に、あらゆるものへの批判精神を貫くアジア現代美術のパワーを感じる作品を紹介します。



ホー・ズーニエン(シンガポール)
《ウタマー―歴史に現れた名はすべて我なり》2003年
Ho Tzu Nyen (Singapore) Utama—Every Name in History is I, 2003



アーイシャ・ハリッド(パキスタン)《ビーナスの誕生》2001年
Aisha Khalid (Pakistan) Birth of Venus, 2001

真夏のあじびアドベンチャー
— アジア美術を冒険しよう

Summer Adventure in AJIBI: Exploring the World of Asian Art

6/27(木)－9/3(火)

冒険をテーマに、不思議いっぱいの世界やいつもの日常をファンタジーのように変幻自在に捉えた作品を紹介。インドの神々の冒険物語から、都市に潜む小さな生き物たちの世界まで、あじびで刺激あふれる楽しい冒険に出かけましょう!



ドーンディ・カンタヴィライ(ラオス)《シンサイ》1996年
Douangdy Khanthavilay (Laos) Xinxay, 1996

日韓国交正常化60周年記念 韓国美術のリアリティ

60th anniversary of the Normalization of Diplomatic Relations between Japan and South Korea: Realities in Korean Art

12/19(木)－2025/4/8(火)

韓国初の実験映画を制作したキム・グリムから、独自の抽象絵画を発展させたキム・ファンギ、民主化運動のなか奔走したホン・ソンダム、多様な表現に挑む若手作家まで、韓国現代史を振り返りながら、韓国美術の魅力を紹介します。



キム・グリム《1/24秒の意味》1969年／1984年 Kim Kulim Meaning of 1/24 Second, 1969/1984

あじびレジデンスの部屋 Room for Residence Program

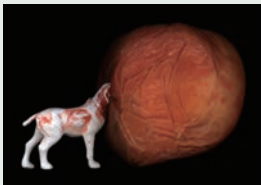
過去のレジデンス作家・研究者たちや福岡で制作された作品やワークショップなど、「レジデンス事業」の広がりを紹介します。

① 路上のスクャノグラフィー — アンキ・プルバンドノ

Part I : Scanography on the Street by Angki Purbandonno

4/20(土)－9/3(火)

街中や路上で見つけたさまざまなオブジェを、スキャナーを用いて物語性のある写真作品に表現するアンキ・プルバンドノ(インドネシア)。2009年の福岡でのレジデンス作品をはじめ、プルバンドノがアジア各地で制作した写真作品を紹介します。



《空腹でいこう》2009年
Stay Hungry, 2009

② ミャンマーの美術作家たちはいま — アウンコー

Part II : Artists in Myanmar Today—Aung Ko

9/14(土)－12/17(火)

10年余の民政期を経て、2021年のクーデターに揺れるミャンマー。自分の幼年時代や故郷をテーマに制作するアウンコーを取り上げ、その作品や福岡の人々との交流の記録のほか、クーデター後のフランスに逃れてからの活動もあわせて紹介します。



《アウンコーの村》2010～2011年
Aung Ko's Village, 2010-11

③ 都市を映す

Part III : Reflection of the City

12/19(木)－2025/4/8(火)

大きな変化を続ける天神の街。これまで福岡で滞在制作してきた美術作家たちは、その時々都市におけるモノや人の動き、建築を映しとってきました。今や世界的に活躍するムン・キョンウォン(韓国)や、世界各地のレジデンスに参加するジョリー・ン・モク(香港)らが福岡で制作した作品をとおして、都市の変遷をたどります。



ムン・キョンウォン《Stop it!》2005年
Moon Kyungwon Stop it!, 2005